可児弘明 編

もっと知りたい
香港 付・マカオ

弘文堂

可児弘明編

もっと知りたい
香港

付・マカオ

弘文堂

編者紹介（カッコ内は執筆担当）

可児弘明（はじめに，自然，歴史，人口・土地・住宅）

1932年生まれ。慶応義塾大学文学部史学科卒業。
現在，慶応義塾大学文学部教授。
著書　『香港の水上居民』
　　『近代中国の「苦力」と「猪花」』
　　『シンガポール海峡都市の風景』
　　[illegible]

もっと知りたい香港

昭和59年7月10日　初版1刷発行
昭和62年3月20日　同　3刷発行

初版2刷発行に際して、中英交渉合意に伴う必要な訂正を行った。特に、「香港と中国」を新たに書加え、「香港問題と香港の行方」は削除した。

©編　者　可　児　弘　明
発行者　鯉　淵　年　祐

株式会社　弘　文　堂　101 東京都千代田区神田駿河台1の7—13
TEL　(294)　4801
振替　東京2—53909

ISBN4-335-51017-9　港北出版印刷・井上製本

Printed in Japan

はじめに

香港は人も知る自由貿易港、そして、皮肉なことに、人民中国にあるイギリスの植民地である。資本主義と社会主義、金持ちと貧乏人、東洋と西洋が同居するこの都市へ、日本からは毎年五〇万人前後のツーリストが訪れる。アメリカ、台湾、韓国に次いで、第四位の海外旅行先である。もうすっかり日本人におなじみになった都市の一つだといってよい。

香港をジャン・コクトウは「火竜の町」と形容したということであるが、この火竜は、今、鱗(うろこ)をさかだて、身をくねらせて行方を求めている。一九九七年七月一日を期して、香港全地域の主権を中国が回復する問題（九七年問題）をめぐって、新時代への様々な動きをみせているからである。振り返ってみると、イギリスの植民地として香港が近代史に躍り出たのは一八四二年のことであるから、香港史は既に一世紀半近いことになる。「借りた土地」の「借りた期限」が、いよいよ大詰めを迎えようとしているのである。今世紀最後の、アジアにおけるドラマチックな政治劇であるのかもしれない。

もっとも、香港といえば「慕情」の町、買物天国、百万ドルの夜景というのが平均的なステロタイプである日本人にとって、九七年問題は対岸の火事として一般にはうけとめられるかもしれない。

しかし、日本にとってみると、香港はアジアでは韓国、台湾に次ぐ重要な輸出市場である。香港サイドからいうと、輸入総額の二四％までが対日貿易によっているのである。加工貿易の原材料を、大幅に日本に依存しているからである。また香港にたいする外国投資をみると、日本からのそれは約二二億香港ドル、外国投資総額の三一・五％を占めており、米国に次いで二位なのである。香港は日本の重要な貿易パートナーであり、日本とは国際経済面での相互依存が強いのである。このことからだけでも、香港で今日起こりつつあることは、明日の日本とも決して無関係ではありえないのである。

しかし、アジアの都市のなかで、香港がひときわ感興に満ちているのは、ホットな国際政治問題や、経済的な相互依存のためだけではない。香港は総面積で沖縄本島よりも狭い上、半分近くが荒地なのである。そこに五三九万人以上の人間が住んでいるが、日本と同じように、あるいは日本以上に、土地が狭く、天然資源に恵まれず、あるのは「花崗岩、砂、魚、それに人間さまくらい」（リチャード・ヒューズ著、中島嶺雄訳『香港―主人なき都市』一九六八年）なのである。その香港が世界貿易で一六位を占め、時計と玩具の輸出量で世界一、コンテナ輸送の取扱量で世界三位、そして金融センターとしても世界三位であり、国民所得は日本、シンガポールに次いでアジアで三位に位置する繁栄をとげているのである。家庭の九四％が一台もしくはそれ以上のテレビ受像機をもち、電話は一〇〇人につき約三八台の普及をみているが、これだけの普及率は、地続きの中華人民共和国はもちろん、東南アジア諸国ではみあたらない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

驚くべきことに、香港のこうした繁栄は、この四半世紀の短期間で現出したものである。韓素英（ハンスーイン）があの甘いラブ・ストーリー『慕情』を出版した一九五二年頃はもちろん、私が初めて香港に留学した六〇年代になっても、香港はまだそこかしこに貧しさをむき出しにしていた。一九六四年から七年半にわたり香港総督を勤めたディビット・トレンチが、七一年一〇月一日、諮問機関である立法評議会における最後の演説で、「過去一五年間における香港の高度成長に匹敵しうる国は、半ダースにも満たないであろう」と、香港経済、香港社会の変化を誇らしげに回想したのも無理からぬところである。経済の成長に伴って、社会や生活様式の変化も激しかった。六〇年代には街頭で一般的であった長衫（チャンサン）姿の女性がぐんと少なくなったのは、その象徴的な現象であろう。身体にぴったりと巻きつき、裾からスリットの入るあの中国服は、もともと労働に従事しない女性の衣服であったのである。

こうした香港の経済成長を特色づけるのは、日本やシンガポールのような政府主導型の成長でなかったことである。香港は今でも基本的には初期資本主義的な自由主義経済を原則としている。政府は産業用地を造成するが、資本を投下し、成功したり失敗するのは、常に民間資本なのである。してみると、「香港の奇跡」というにはいささかオーバーであるが、したたかなまでの経済成長は、とうてい経済政策や経済構造だけで説明しきれるものではない。それ以外の何かが、香港を活性化する力になっているとみなければならないのである。在地の生活に密着し、具体的な体験のなかから香港を認識しようとする人々は、その何かが、他ならぬ香港の住民それ自身であることに、異論

をさしはさまないことであろう。人間こそ、天然資源をもたない香港の唯一の資源なのである。

香港を訪れた日本人ツーリストは、当初のうち異郷にやって来たという感慨が乏しいにちがいない。住民の九八%を占める中国系住民は、背丈も肌の色も、我々とさほどかわらないからである。しかし、その外見はともかく、彼らは我々日本人とは別の型の、あけっぴろげなエコノミック・アニマルなのである。地球上をかけまわってみても、これほどまでに金銭欲をはじめとする現世的な人間の欲望を赤裸々にむき出しにする都市は、おそらく見つからないことであろう。その活力は、銀行や取引所、会社、商店だけでなく、街頭でも、餐庁（レストラン）でも、香港中のどこへ行っても、むんむんとした熱気となって伝わってくる。

不幸なことに、日本での香港にたいするもう一つのステロタイプは、この世の悪業という悪業、それに偽物という偽物がはびこる、背徳的な、おそろしい都市ということである。だから、ロッキード事件の時、ロッキード社が香港で日本円を調達したと聞いても、あるいは韓国の名女優崔銀姫が香港で拉致されて北朝鮮に連れ去られたと聞いても、あまり驚かないのである。一九七五年当時、日本人二五人に一人がスリにあい、その年間被害総額が三億円、調査に派遣された警察庁の係官六人のうち三人がまたすられた（近藤竜夫『国際都市香港の昼と夜』改訂新版、朝日ソノラマ、一九八二年）というのでは、香港を東洋の伏魔殿（パンデイモニウム）と思いこむむきがあっても、仕方がないのである。

しかし活力の影の部分だけを拡大して、光の部分から眼をそらすことは、正しい理解の仕方であるとはいえない。陰影を欠いては、都市の話も生気を欠こうというものである。活力の光と影をあ

わせみて、初めて鮮明な香港の全体像が浮上するのである。

とかく生活臭のするものを押入れに格納しなければ気のすまない日本人にとって、香港、とりわけ中国人の生活様式はわかりにくいものであるかもしれない。客に金銭を放り出す銀行や商店、テーブルの上に食べかすを吐きだす習慣、店頭であろうとかまわず食事をかっこむ習慣、「それいくら」と持っている品物の値段を無遠慮に聞く見知らぬ人など、日本人が文化摩擦を起こすであろう種はいくらでもある。しかし、文化摩擦を起こすだけならまだ罪が軽い。問題なのは、日本式が最上だと思いこんで、それを基準にして、異なる生活様式を香港の「おくれた」部分と結びつけることである。香港で経済、交通、社会、福祉、教育など社会全般におけるインフラストラクチュアのおくれが認められることが確かであるにしても、それと生活様式とは別の問題なのである。ニワトリの足先やアヒルの水搔(みずかき)を食べる香港の生活風景に接して、「日本に生まれてよかった」と思わず口にするツーリストは多い。その人たちの心中には、きっと、ニワトリの足先やアヒルの水搔を食べるのは野蛮な行為であり、やはり香港は「おくれている」とか、「貧しい」という感懐が去来しているのにちがいないのである。日本人が納豆を食べるのをみて、欧人から日本人はいやなニオイのする腐った大豆を食べる野蛮人だと決めつけられたら、その人たちは一体どう答えるのであろうか。食物に絶対的な価値というものはないのである。ちなみに申しあげると、ニワトリの足先、アヒルの水搔ほどゼラチン質に富む食物はないのである。ためしに鳥屋さんからニワトリの足先をもらってきて、スープにして、それからさます実験をおすすめする。たっぷりとゼラチンが固まっているはずであ

る。

香港へのツーリストにとってみれば、むしろ香港から学ぶべきことを探す方が遙かに賢い旅なのである。この都市の中国系住民がものの美事に体得している「懐具合に応じて人生を享受する」仕方などは、さしずめその一つであろう。もっとも、これはやわな胃袋の持主には余りおすすめできない。そのかわり、胃袋に自信のない方々には、次のおすすめができる。日本の巨大都市というのは、「近代化」の過程において、余りにも整備され、美化されすぎてしまっている。若者の寄りつかない銀座などはその典型的な例である。それにたいして、香港は、日本の巨大都市が失ってしまった、あるいは意識的に切りすてたが、実は都市生活の原点となる部分を巧みに持ち続けているのである。九竜の廟街（ミュウガイ）に立つ夜市、そして、ごみごみとした町々のなりたちが、飲みこめるようになればなおのこと、都市の原点が、異なった歴史、異なった生活様式を背負った人々が出会い、意味が交換される空間であることを、よく理解できるにちがいないのである。そこでは、都市住民は決して砂のようにバラバラな存在ではない。誰しもが生きていることを実感し、明日を夢みているのである。もしも都市の近代化というものが民族性を包みこんでいくものだとしたら、このちがいが一体何によるものか、これだけでも一考してみる価値があろうというものである。

さて、香港という大切な貿易パートナーは、表面的なスマイルは別として、厳しい対日感情をまだ残しているところである。太平洋戦争中、香港自体が直接日本軍の砲火にさらされた上、四年間近い日本軍政下の苦い生活体験をよぎなくされた記憶をもっているからである。また日中戦争に

よって、肉親や財産を失った大陸からの移住者も、相当数住んでいるのである。この都市にも、外国からのビジターなど広東語はわかるまいと決めこんでいる「気のいい」連中が沢山いるが、広東人どうしの会話で日本人という時は、たいてい「日本仔（ヤップーンツァイ）」を使う。この日本仔は日本人にたいする悪意のある呼び方なのである。経済的な相互依存の度合いが強ければ、それだけ対日感情の厳しさが増すのはこのためである。最近でいえば、一九八二年夏の教科書問題にたいする抗議ぶりが、このことをよく示している。日本人にとって、香港はやっかいな、しかし避けて通れない、あるいは避けて通ってはいけない問題をもつところでもあるのである。

こうしたわけで、香港は買物の魅力を中心とした、最も身近かで手軽な海外旅行地の一つでありながら、外国人がその全体像を把握するには、余りにも多くの顔をもっている。本書で歴史と風土を導入部として、政治、経済の国際環境のなかで香港を捉えるとともに、内なる視点から香港の社会や人々の生活を解説するという、いわば複眼的構成をとったのもそのためである。なにはともあれ、さっそく香港の街角に立ってみることにしよう。

なお本書で使用するドルは、特に注記をしないかぎり、香港ドルのことであり、一九八六年五月二〇日の交換レートは一〇〇円＝四・五八ドル（一ドル＝約二一円八三銭）である。また、写真の説明文の末尾には、写真の提供者を明記した。本文執筆者は姓のみ、香港観光協会はＨＫＴＡ、マカオ政府観光局はＭＧＴＩＢの略号で示してある。

（可児弘明）

目　次

はじめに（可児弘明）

I　香港の歴史と風土

1　自然（可児弘明）
地形 2　気候 3　薄い自然の恵み 5

2　歴史（可児弘明）
香港前史 7　香港の誕生 13（女王陛下の埋立地 17）
香港の成長 19（拝金主義の原点 20）
非武装経済闘争の嵐 24（日本占領下の香港 26）
戦後の香港 27（後退する自由放任主義 34　ふくれあがる政治要求 37）

3　人口・土地・住宅（可児弘明）
ニュータウンの建設 40　五二〇万の働き蜂 46

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

II 国際経済都市・香港

1 香港と中国（眞田岩助）
返還合意で過渡期へ 52　素早い中国側の対応とイギリスの粘り腰 53
中国側の新たな課題 56

2 政治と財政（姫田光義）
香港の政治の特徴 59　政治・行政構造 61　官僚体制 64
財政・予算政策 69

3 経済特区（稲垣　清）
香港の国際的地位 74　中国との経済関係 77
経済特区の性格とねらい 79　経済特区の現状 80
特区の行方と香港 86

4 経済（山本裕美）
高度経済成長の諸要因 88　雇用と生産 91　加工貿易と中継貿易 95
香港の工業 101　香港経済の発展戦略 105

5 金融（浜下武志）
国際金融市場香港 109　金融速度 112　市況変動 116　華僑送金 123
金融態度 126　香港上海銀行グループ 132

新たな管理通貨体制と香港政庁 134

6 労働（小泉允雄）
香港を支える工場労働者 140　初期資本主義的な労働条件 142
労働者保護政策 146　特異な経済構造 149

7 運輸・交通・通信（小泉允雄）
港湾都市の誕生 152　綜合的な発展 153（海運 156　航空 157
陸上運輸・交通 158　通信 162）　能率向上の光と影 162

III 香港の人々と暮らし

1 言語（中嶋幹起）
粵語と広東語 166　粵語の中の非漢語的要素 168　客家語と粵語 170
「蜑家」と「福佬」の言語 172　言語的コロニー 175　欧化した広東語 176

2 宗教（吉原和男）
香港の宗教 179　宗教と祭礼 180（主な年中行事 182　太平清醮 184
寺廟の神々と人々 191）　外来宗教 196

3 伝統芸能（尾上兼英）
説書・説唱 200　木偶戯 203　演劇 205　舞踊・音楽 211　獅子・飄色 212

4 教育制度（中嶋幹起）
教育の過去と現在214　学校教育制度216（幼稚園218　小学校218
中学校218　大学220　香港大学220　香港中文大学220
香港理工学院221）　留学222　今後の課題222

IV 香港インサイドストーリー

1 街路と生活（山口文憲）
街市と小販228　酒楼の朝232　映画とテレビの共存235

2 香港人気質（戸張東夫）
香港の広東人239　人脈社会242　金銭掛帥244　政治的無関心247

3 買い物天国（垂水健二）
安価な舶来品251　香港・中国産品の魅力255　ニセモノ256
買い物地図259

4 広東人の食生活（岡　宗義）
香港の街頭風景262　広東の珍味263（鹹魚鹹蛋264　犬料理と果狸266
蛇料理267　すっぽん、鱘魚、蟹269　飲茶270　うまいもの屋271）

5 犯罪の温床（戸張東夫）
犯罪都市274　新移民問題278　越境する犯罪281（三合会283）
麻薬の密輸285

V 香港と日本（松本繁一）
1 香港・日本交流史290
2 英国統治復活以後295
3 香港と日本の未来301

付篇 香港歴史散歩（辻　伸久）
1 英人植民以前の香港307
漢族の定住以前307　漢族と香港307（鄧氏の栄光308　客家山村308）
石三題310
2 英国直轄植民地・香港311
ビクトリア市の建設312（政庁・軍隊・教会312　最高法院と
香港上海銀行313　ダデル街と毒入りパン事件314）

香港島一番地 314　港ホンコン 315　植民地香港のチャイナ・タウン 316
（ペスト流行——北里柴三郎と東華医院 316　魯迅と孫文の足跡 317）

付篇　マカオ——人と社会（松本繁一）

1　政治的要衝の地 321

2　経済的発展の途 324
　マカオと日本 330

3　名所・旧跡 331
　聖ポール天主堂跡　モンテの砦　市評議会　聖ジョセフ修道院
　ペンニャ教会と司教館　カモンエス博物館　カモンエス庭園
　ギア灯台　孫文記念館　盧廉若花園　聖ドミンゴ教会
　ジョルジュ・アルバレス記念碑　媽閣廟　観音堂　境界関門

装幀　柴田成敏

I 香港の歴史と風土

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com